

ラブの魔神^が

美女だったので、恋人にして

同棲生活を

始めてみた

小説 百花乱太郎
挿絵 泉水いこ

立ち読み版



第一章	きっかけは願い事	006
第二章	同棲生活は誘惑の嵐	038
第三章	彼女の性活事情	068
第四章	初めての協同性活	097
第五章	屈伏の奴隷性活	134
第六章	刺激的な野外性活	168
第七章	湯けむり極楽性活	204
終章	同棲生活の終焉	242

登場人物紹介

Characters



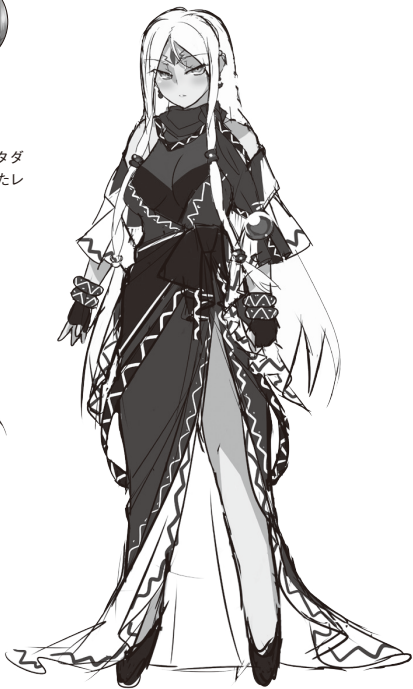
すずき こうた 鈴木康太

都心で一人暮らしの若者。露天商にタダでもらった、魔法のランプから現われたレイアに一目惚れする。



セリナ

白銀の甲冑で身体を覆った戦乙女。地上の秩序を守る役割を担っており、そのためか、性格はかなり生真面目。



レイア

願いを叶えられるという魔法のランプに宿る美女。空を飛ぶ、身体を煙に変えるなど超常の力を持つ。

第一章 きつかけは願ひ事

夜の帳とほりが下りると都会の街はきらびやかなネオンに彩られ、一度は落ち着きかけた人の活気が再び勢いを取り戻す。

仕事を終えて帰宅途中の鈴木康太は、駅から出ると街の景色に、少し煩わづらわしそうな顔をした。サークル活動の大学生が賑やかな人だかりを作り、スーツ姿の社会人は重圧から解放されて陽気に浮かれている。渋滞の原因を作っている彼らの間を、康太は縫うようにすり抜けていった。

「はあー……」

雑踏を通り抜けたところで康太は深いため息をついた。上京して間もないころは華やかな都会の夜に心を躍らせていたが、数年も経つとそれは自分とは関係のないものだけだということがわかってくる。そして彼らとは違う人種だと気づいた今では、それは自分の惨みじめさを思い起こさせる景色でしかなかった。

「憧れて都会へ出てきたけど……、結局なんにもなかったな」

そんな独り言ですら、康太にとっては久しぶりに発した言葉だった。こんなにたくさん

の人がいる都会なのに、たった一人の話し相手もない。仕事仲間はあるが、誰も必要以上には関わりとうとしない。日給八千円でもくもくと穴を掘って、家と仕事場を往復する毎日。康太は孤独だった。

「僕は人間じゃないな。たぶんモグラだ」

なんのためかも知らずに、ただひたすらに穴を掘っている。朝が訪れると地下に潜り、日が沈むと地上に戻る。ここしばらく満足に太陽の光を浴びた気がしない。

（希望の光なんて見えやしない。いったいなにを目的に生きていったらいいんだ）

「ちよいとお兄さん。見ていっておくれよ」

通りすがりに露天商から声をかけられた。当然余計なものを買う余裕はない。普段ならにべもなく通り去るところだが、この日は気まぐれで足を止めた。明確に意識したわけではないが、人との繋がりを欲していたようだった。

「なにを売ってるんですか？」

路上にマットが敷かれ、その上に商品が陳列されている。

「そりゃあめずらしいものばかりじゃ。余所よそじゃあ、なかなかお目にかかれない」

露天商は頭にターバンを巻き、髭をたっぷりと蓄えている。見るからに外国人の老人だが、外見とは裏腹に日本語は上手く、意思疎通に問題はなかった。

「ほら、これなんてお兄さんに似合いそうじゃ」

露天商が手に取ったものは、先に綺麗な石が括り付けられた首飾りだった。確かに悪くはないと思つた。そんな風を感じたのも、久しぶりの会話が気分を高揚させているからなのかもしれない。

「へえ、いいですね。これおいくらなんですか？」

「ん。これは、一万五千円じゃのう」

「一万っ！ ……」

「ちよつとちよつと。これでも格安なんだがのう」

なにも言っていないのに、露天商は慌てて言葉を付け足す。

「お兄さんはなんにもわかっちゃいない。この先についている石は、とある秘境でしか採れないとても希少な石じゃ。特別な力が宿っていて、身につけているだけで持ち主に幸せを運んできてくれる。それを高いなんて言ったら、うちも商売上がったりじゃぞい」

（おいおい、雑誌の裏なんかでよく見る謳い文句だな。完全に逆効果だぞ）

すでに興味を失っている康太だったが、傍らに置いてある古ぼけたランプになぜか目が引き付けられた。手を伸ばし直に持つてみると、実際にどこか魅かれるものがある。

「あつ！ そ、それはのう……」

康太がランプに興味を持ったことに気がついて、露天商は動揺を見せた。

「これ……、なんかイイ感じですね。おいくらですか？」

「え〜とね、それは〜、……五百円」

「えっ！ ほんとですか!? めっちゃお手ごろな値段じゃないですか」

興味がない人にとってはそれでも高いと感じるかもしれない。しかし首飾りを一万円越えで売りつけられようとしていたため、康太には格安に思えた。

「僕、ちよつとだけアンティークには興味があつたんですよ。このランプは雰囲気もあるし、置いておくだけでも趣おもむきがあるかも」

「へ、へえ〜。そ、そうかい。興味がのう〜」

露天商は明らかに落ち着かない様子で相槌あいつちを打つ。

「う〜ん……、よし。決めた！ これ買いますよ」

「ほ、本当かい。え〜と、ありがとうございます」

「五百円でしたよね。おつ、ちようどあります。よつ、と……はい」

康太が五百円硬貨を差し出すと、露天商は決まり悪そうに手を広げる。しかし硬貨を受け取る寸前に、露天商は手を閉じてしまった。

「すまないお客さん。やっぱりそれは売れない」

「……え！ どうしてですか？」

数秒間沈黙した後、露天商は重い口を開いた。

「実はそのランプはいわくつきなんじゃ。その……、厄介払いしようところに並べていた……。すまないのう」

「いわくつき？」

「ああ、そうじゃ。なんでも願いを叶える魔法のランプ、これはそう呼ばれていてのう。確か……この辺を三回擦すって、『私の願いを叶えたまえ』とかなんとか言うと、中から魔人が現れるらしいのじゃ」

「へ、へえ〜〜」

（このおじいさん、まうた変なこと言い始めちゃったよ）

「魔人は三つだけなんでも願い事を叶えてくれる。だが問題はその後じゃ。願いを叶えたであろう者たちはみな命を落としている。おそらくそれが願いを叶える代償ということなんじゃろう。だからこのランプは巡り巡っているうちに、呪いのランプとも呼ばれたんだんじゃ」

（こんな売り文句つけなくても買うって言うてるのに……って、あれっ？ おかしいな。なんで買わせないためにこんなことを言ってるんだ？）

「というわけじゃ。だからお兄さんにこれ売ることはできん」

「ああ、そうですか。それは仕方ないですね」

康太はそう言つて呆気なくランプを戻そうとする。すると露天商はその手を掴んだ。

「しかしすべてをわかつた上でこれを欲しいと言つてくれるのなら、お兄さんにただで譲り渡してもいい」

「え? ……まあ、ただで貰えるというのなら、嬉しいですけど。……で、結局これを譲りたいのか、譲りたくないのか、どっちなんです?」

「見ての通り、わしは老いぼれじゃ。どんな形であれ、いずれ誰かにこれを託さないといけないとは思つていた。しかし呪われて死なれでもしたら寝覚めが悪いからう。つまる
ところ、まあ、良心の呵責かしぐの問題じゃ」

「はあ。おじいさん、結構真面目なんですね。世の中、他人のことなんかどうでもいいつて人ばかりだと思つてましたよ」

「歳を取ると死後の世界のことを考えるのじゃ」

康太はマットに陳列された高額な商品を眺める。そして心の中で毒づいた。

（こういうぼったくり商品を販売しても、良心は痛まないのか。都合がいい……）

「じゃあ、いいですよ。僕が貰い受けても」

「え、あ……、しかし……」

「大丈夫ですよ。全部知った上で引き受けますから。これもなにかの縁だったんじゃないですかね」

縁という普段使わない言葉が、康太の口から自然に出ていた。康太自身、なぜこんなに自分から貰い受けようとしているのか、少し不思議な気分がしていた。

「うーん……そうか。まあ、使い方に気を付ければ問題ないじゃろうしな。よし」

康太が魔法のランプを引き受けることになると、露天商は気が晴れたようだった。「これで肩の荷が下りたわい」などと言って、テキパキとランプを包み始め、手提げ袋まで用意して持たせてくれた。

帰り道、右手の確かな重みが露天商との会話を何度も思い起こさせる。

「なんでも三つの願い事を叶えてくれるか……」

まるで夢のような話である。もちろんそんな話を鵜呑みにするほどお人よしではない。ただ、このランプを持つていることによる呪いのようなものは、心の中で少しだけ不気味に感じていた。

「呪いのアイテムか……。たとえどんな願い事を叶えてくれるとしても、死ぬとわかって

いれば普通の人なら誰も欲しがらないわな、そりゃあ」

まるで他人事ひとことのようなつぶやきだった。実際このランブを不気味と思えど、康太はそれほど恐れてはいない。荒唐無稽ことうちげな話はあまり信じる性質たちではないし、何より呪われてもかわまないという自暴自棄こぼれのような気持ちがあった。

（僕が生きている意味なんてないもんな。たとえ呪われ、殺されたところで誰も……。やめようやめよう、こんな風に考えるのは。せつかくただで貰ったんだから楽しいことを考えよう。なんでも願い事が叶うのか。ハハハ♪ そうだな、まずはなにを頼もうか）

いつしか康太は、子供のような妄想を始めた。

（やっぱり金なのかな……。金があれば世の中たいていのことは上手くいくからなく。でも命と引き換えだと思ふとちよつともつたいなく感じるかも。それにお金つて信用が乗つただだの紙切れだつて言うし……。うゝゝゝん、でもマネーゲームをしかけて世の中を混乱させるのはおもしろいかも）

ふと通りかかりの高級そうなレストランが目に入った。ぐうぐう、と康太のお腹が鳴る。（キャビア、フォアグラ、うに、あわび、フカヒレ、ツバメの巣、一度は食べたい満漢全席。なんでも食べ放題だ。でも高級料理は本当に美味うまいいのかな。想像つかないや。今のこの空腹を満たすにはやっぱり、肉汁滴るハンバーグ。緻密な歯ごたえのエビフライ。ス

パイシーなカレースープ。この辺のガッツリしたものを思う存分いきいたいな)

哀しいかな、庶民的な御馳走を想像した方が唾液がとめどなく湧き上がる。口の中はすぐに唾液で溢れかえり、口の端からだらしなく涎よだれを垂らしてしまう。慌ててそれを袖で拭いていると、レストランから現れた女性と目が合った。バリバリ働くキャリアOL風の出で立ちで、こちらを少しも気に留めることなくタクシーに乗り込んでいった。

「うわっ。完全に眼中にない。……でも」

(ヤリてえ)。タクシーに乗り込むときのあの尻！ スカートが肉圧で張り詰めて桃の形にくっつきり！ たまんねえ！ 本心に願う事が叶うのなら、あの人もエッチできるんだよな。完全に見下されてたけど、下克上を起こして組み敷けるんだ。あのくびれた腰を掴んで、思いきり突き込んで、あんあんよがり泣かせて。や、やばい。勃たつてきた)

そんな妄想を繰り返していると、いつの間にか自分が住むアパートへと辿り着いていた。結論として、もしも願う事がなんでも叶うのなら、やはり酒池肉林は欠かせないということだった。

テレビをつけ、夕食の準備をする。電気釜に残っているご飯をお茶碗によそって、帰宅途中で買ったコロッケをパックのままコタツテーブルに広げる。さびしい食卓を見て、現実はこのものだとか改めて思い直す。残り物のサラダがあつたことを思い出し、それも冷

蔵庫から取り出すと、食卓は少しだけ彩りが増した。

お腹はもうあまり猶予がなかった。スカスカの胃袋の底から、まるで自分とは別の生き物のような唸り声が聞こえてきた。消化するものが足りないと飢餓感を訴えてくる。康太はドカッと腰を下ろし、箸を持ちつつ両手を合わせる。

「いただきます」

空腹を一気に満たすように、惣菜そうざいを一口、そしてゴハンをかき込んだ。

夕食を食べ終え洗い物を済ませると、テレビ画面ではニュース番組が流れていた。身だしなみがきちつと整った理知的な女性が、流暢りゅうちやうかつ明朗に原稿を読んでいる。

「おっ♪ 北条アナほうちょうはやっぱり綺麗だねえ♡ こういう女性を大和撫子っていうんだよ」

政策動向を伝え終えると、北条貴子たかこアナウンサーはそこに鋭い指摘をした。

『しかしまた庶民に負担を押し付けるといふ形になるのではないでしようか』

ここしばらくそんな政策しか聞いたことがない。自分たちが払った血税に対し、福祉の恩恵は感じたことがないのだ。税金の使い道も、負担を押し付ける役人の高給に消え、役に立たない箱物を作って省庁の権益拡大に使われている。康太は胸の内に憤慨を覚えた。

『一方で公務員の給料はひっそりと上がっています。財政健全化の建前はいいのですが、

やることをやっていますよね』

「そうだよ、ムカつく！」

康太は吐き捨てるように口にした。心の内から破壊衝動が込み上げてくる。

「こんな世界なんか終わってしまえばいい」

なんでも願いたい事が叶うのなら、そのうち一つは決まっているような気がした。どうせ自分の命が尽きるのなら、この世界も道連れにすべてを壊してしまいたい。

「……………」

康太は露天商から貰った紙袋をじつと見つめた。

「……………一回、……………試してみるか」

そう口にすると康太は、紙袋に手を伸ばした。中から布に包まれたランプを取り出し、テーブルの上で広げてみる。

「アンティークとか詳しくないけど、素人目にもやっぱり安物には見えないな」

表面には蔦つたの葉のような文様が見事に描かれていて、形においても機能美というか、調和の取れた美しさのようなものを感じさせた。

しばらく見惚とどれていた康太が、おもむろにランプを手にする。

「えっと、確か……………こうだったかな」

左手で持ち、右手をランプに添える。形をなぞるように、ゆっくり確実に三回擦った。

「私の願いを叶えたまえ。……だったかな」

少し恥ずかしげだった。それはそうだ。いい大人が魔法の呪文を唱えているのだから。

「……………ほら、やっぱり。なんにも起こるわけっ！」

プシュ——。

突然ランプの口から空気が吹き出され、ややあつてからもくもくと煙が上がり始めた。

「わわわっ！」

煙が大量に溢れ出し、あまりの勢いに思わず康太はランプを落としそうになる。

煙は霧散することなく空中に浮遊し、そこへ続々とランプから溢れる煙が合流していく。濃度が上がり、やがて大きな一つの塊となっていくのを、康太はただ見ているだけしかできな

い。妄想のような話が現実味を帯びてきて、その目はまさに皿のように丸くなった。

「あ……、あつ。……あああ。う、嘘だろ……。あ、……ああ」

康太は今さら恐怖を感じ始めていた。明らかかな超常現象が目の前に迫ってきて、手に負えるものではないと身をもって実感し始めている。しかし軽はずみな行動を後悔してももう遅い。ランプからの煙が途切れ、空中に浮遊する塊がモヤモヤと動きだした。粘土のよ

うになつた煙の塊は、明らかになにかを象かたどり始めた。

「ま、魔人が……。まさか、本当に……」

煙は四方へ伸び、腕と脚のような形となる。どんな容姿なのだろうかと、恐ろしい想像が膨らんでしまう。なにせ自分をいずれ死に誘う存在なのだ。人間の体に羊の頭だったり、こもりみtainな翼を生やした人外の姿を思い浮かべ、その手は情けないほどに震えだした。カタカタとランプを鳴らし、その顔も恐怖を隠しきれず引きつっている。

煙はついに人のような形を取り、そして次の瞬間、その中からぶわつと衝撃波のような風を吹き上げた。風は煙を吹き飛ばすと共に、康太の顔を背けさせる。

突風が収まり、康太は恐る恐る目を開く。するとその目に、スリットから覗く脚線美が映り込んだ。混じり気のない乳白色の肌は、張り詰めて陶器とうきのようななめらかな肌質を想像させる。太もものきわどい部分はスカートによつて隠れてしまふが、きゅつと絞り込まれたウエストから、高く張り出したバストへのラインは、服の上からでも思わず目を奪われてしまう。

「私を呼び出したのはお前かい？」

その声に康太は顔を上げる。すると長い睫毛まつげに縁取かろどられた切れ長の目が、鋭い眼差しでこちらを見据まもっていた。



康太は唾を飲み込み、男になる決意を固めると、縦に深く頷いた。

レイアは妖しく微笑むと、声のトーンを落として、たたみかけるように囁く。

「フフフ。見たいかい？」

「は、はい」

康太から決定的な言葉を引き出すと、レイアは意味深に告げる。

「フフフ。本当ならこんなことはしないんだよ。お前は特別だ」

夢のような状況。いよいよ自分にもその瞬間が訪れると思いい、興奮に鼻の穴を膨らませる。しかし、レイアが口にする次の言葉が、康太を一気に現実へと引き戻す。

「願い事がまだ二つ残っているだろう。お前がその一つを使ってでも私に頼むのなら、特別に見せてやってもかまわない。フフフ。どうする、見たくはないかい？」

高まっていた興奮のボルテージは、その言葉を聞いて一気に下がっていった。まるで酔いが醒めたかのように、自分でも驚くほど冷静になっていく。

（ああ……、やつぱり。……やつぱりそういうことか）

だんだんと浮かれていた自分自身に嫌悪を感じ始め、康太の表情が苦々しく変わる。

「レイアさん。とりあえず服を着てください」

「？ なにを言ってるんだい、見たいのだろう。さあ、頼めばいいんだよ」

康太の変化には気がつかず、レイアはあからさまな誘惑を続ける。首筋まで手を伸ばすと、指先をセクシーに動かして、顎の下をくすぐる様に撫でる。

「やめてください、レイアさん。そのままだと風邪引いちゃいますから」
「ムッ……」

康太が冷静な口調で告げると、それがカチンときたようで、レイアの表情が一瞬変わる。「どうした、康太？ 私とお前の仲じゃないか。遠慮する必要はないよ」

レイアは気分を取り直して続けるのだが、康太は腕を取って強制的に止めさせた。レイアはそこでようやく康太の変化に気がつき、みるみる表情を険しくしていった。

「あっ……、ご、ごめんなさい」

レイアの腕を離して、すぐに謝る。康太にはレイアを責める気など微塵もなかった。純情な想いを取り引の材料にされたとしても、もともとは願いたい事という形で恋人に縛り付けてしまっていたのは自分だからだ。康太はなんとかお茶を濁そうと努める。

「じゃ、じゃあ、僕もお風呂にしようかな。あはははは」

しかしその気遣いは、思ったようにはレイアに届かない。

「お前、私を担ぎやがったね。人間の分際で小賢しい男め」
レイアはまるで射殺するような目で康太を睨みつけた。

「か、担ぐだなんて！ そんな疑って掛かるような見方しないでくださいよ」

「大方、私のことを上手く利用する気でいたんだろう。私も舐められたもんだよ」

「ちよつ、ちよつと待つてください。まるで僕が悪巧みでもしたかのように言ってますけど、そこだけは明確に否定しておきますから」

「ああ、うざったいね。この期に及んで、まだ私をコントロールできるとでも思っているのかい！」

「コントロールだなんて……。そんなこと思ってもないですよ」

自分に対する不信感が大きくなっていることが伝わった。どうやらレイアは自分が弄ばれたように感じているようである。その怒りはすでに沸騰寸前で、そう簡単には収まりそうもない。康太は意を決したように顔を上げ、仕切り直そうと努めた。

「あの……。僕はレイアさんのことが好きです」

「フン。そんなことを言えば、女が喜ぶとも思っているのかい。腹立たしいね。いい加減にしなッ！」

制止しようとするレイアの言葉に負けず、康太は話を続ける。

「だから、レイアさんのセクシーな姿を見られて嬉しかったし、すごく興奮しました。その気持ちだけは、嘘偽りありません！」

康太は自分が恥をかこうと、腹を決めていた。

「これがッ！ これがその証拠です！」

冷めた雰囲気で聞いているレイアに向かって、康太は勢い良くズボンを下ろし、裸の下半身を露出した。

「んんッ!!」

反り上がったペニスが飛び出す。突然の行動にレイアは身を仰け反らせて驚いた。

「バツ、バカ野郎！ そんなもん出すんじゃないよ、この変態がッ！」

「そうですよ。僕は変態です。レイアさんのマニアです。レイアさんのストーカーです」

「気持ち悪いよ、お前」

予想はしていたが、その言葉にはやはり落ち込んでしまう。しかし苦々しい表情のまま、康太は自虐的に話を続けた。

「それにエロくて、スケベで、変質者で、発情期のどうしようもない牡です」

「そつ、それだけじゃないよ。えつと…」

「いやらしい露出狂で、気持ちの悪い童貞で……、はあああ……」

「うっ……」

言いたいことを先回りされるため、レイアはなにも言えなくなる。

「だけど……。しようがないでしよ、レイアさんが大好きなんですから。レイアさんだからこんなにドキドキして、レイアさんだからこんなに興奮しているんです」

「……………」

いつしかレイアにも耳をかすような雰囲気が始めていた。

「だから本当はレイアさんの裸が見たいです。できることならレイアさんとエッチしたいです。でも……。だけどそれを願う事ですることはできません」

「なっ！ 誰がやらせるって言ったよ。……み、見せるだけだ。いくら願う事をしたってそれだけはさせないよ」

「あ、ああ。そうですね……。それはそれで残念のような……。と、とにかく、そういうことをするのは、両者の真正なる合意のもとでないと僕には意味がないんです。僕はレイアさんの心が欲しいんです」

「くっ……。両者の合意って、そんなことあり得ないね。それに心ってなんだい」

口ではぶつきらぼうに言うが、レイアの状態には、先ほどの刺々しさはなくなっていた。「わかってもらえましたか？」

康太は砲身の先を近づけて訪ねると、レイアは顔を背けた。

「汚いものを近づけるんじゃないよ。ほら、とつとつとズボンを穿いて隠しな」

「いえ。わかってもらえらるまで穿きません」

「なっ！ ……チッ。わかったよ」

レイアは一度康太を睨みつけるが、ぶいっと再び顔を背け、ぶつきらぼうに答えた。

「わかってもらえましたか。よかった」

心底安堵したような表情を見せ、ようやく康太はズボンを穿いた。

風呂から上がり、パジャマに着替えても康太の股間の昂りは収まっていなかった。康太は隠しているつもりでも、レイアはそれを厳しく見咎める。

「お前、いつまでそうさせとくつもりだい」

「あはははは……す、すみません。こればかりは自分の意思ではどうにもできなくて」
康太は恥ずかしそうに笑いながら、なるべく股間を隠そうとする。その様子を気にしてか、レイアは何度かチラ見して、なにか言いたげに口を開きかける。が、躊躇った末に結局口を噤む。

「ごめんなさい」

唐突に康太が謝った。レイアは一瞬動揺した様子を見せて、その意味を聞く。

「な、なにがだい？」

「さっきはあんなに格好つけたこと言ったけど、本当はレイアさんの意思を無視しているのは僕のほうです。僕がレイアさんに彼女になつてほしいって願ひ事をしたから……」

康太は言い難そうに、何度も言葉を止めながら話を続ける。

「でも、矛盾してるかもしれないけど、この願ひ事は撤回したくないんです。僕は、僕の人生は、レイアさんが隣にいてくれてすごく変わりました。キラキラと輝いて、毎日が楽しくて、初めて自分の人生を謳歌しているんです。だから、だから……」

康太は言葉を詰まらせる。それを見てレイアが落ち着いた口調で話し始める。

「いいんじゃないか。なんでも願ひ事を叶えると言ったのは私のほうだし」

「で、でもレイアさんは願ひ事を叶えさせて、早く終わらせたいんじゃない……」

「多少は大目に見るさ。私には永遠のように時間があるからな」

「……………」

「それに、人間の願ひ事なんてこれまでさんざん叶えてきたけど、どれもこれもみんな身勝手なもんだつたよ。浅ましくて、卑しくて、そんなもんだろ」

レイアは苦々しい顔でそう語る。しかし康太と向き合うと、ふっと表情を緩ませ、言葉を続ける。

「それに比べたら、お前の願ひ事なんてまだ可愛いもんだよ」

が急上昇を始める。頭の中までがいつもと違って、世界が揺れているように感じる。初めて他人に性器を触れられたが、こんなに鋭い感覚は予想外だった。

「ちょ、ちよつと待って……」

なんとかそれだけを言う。気持ちいいとか、そういう問題を通り越して、全身の皮膚が神経を剥き出しにされたようで恐かった。

「なんだい？ ……どうした、やめようか？」

「い、いや。そうじゃなくて。人に触られたのが初めてだったから、痺れちゃって。こんな感覚、初めてだよ。こ、今度はちゃんとするから。だから……、また……」

「そうかい。じゃあ、続けるよ」

再びレイアが茎胴を握ると、またも康太は呻き声を上げ、ビクンと仰け反った。しかし今度はレイアを制止しなかった。

最初は発病したかのように全身の毛穴が開き、頭の中まで浸透する熱に思考を持っていかれそうになった。そのことを思うと、今はだいぶ身体を制御できている。

「痺れるっ……。う……うう……、だけど」

痺れの中に甘美な感覚を判別できるほどに、康太は快感を享受し始めていた。

「気持ちいいのかい？」

その問いに康太はカクカクと頷く。刺激には徐々に慣れはしてきたものの、それ以外のことをする余裕など微塵もない。急所を握られたかのように力が抜けて、為す術なく無防備な姿を晒してしまふ。

薄く目を開けると、霞がかかった視界に自分の股間の景色が映り込む。黒々と生い茂る陰毛の中から、茶色に紫がかった不気味な色合いの性器がそそり立つ。それを穢けがれとは無縁の細く長い指が優しくあやしている。五本の指はまるで白魚のように綺麗で、血管を浮き立たせる男根とのコントラストが、なにか妖しい興奮を引き起こす。血流が活発になり、砲身はビクン、ビクンと自分の意思によらず波を打ち始めていた。

「そんなにいいのかい？」

その問いに視線を向けると、レイアはいつもと変わらぬクールな表情だった。自分は欲望に身を任せ、快感に息を荒くしている。無様な醜態ばかり晒して自分が情けなく思えるのだが、どういうわけか、もつと自分自身をさらけ出したいという矛盾した衝動にも駆られる。

「いい……。気持ちいいよお……。レイアさん」

普段ならとても出せない甘えた声で応えてしまふ。どんな風に思われてしまったのか不安になり、複雑な気持ちを宿した瞳でレイアを見る。

「……………」

レイアはなにも言わない代わりに、じっとこちらを見つめ返してきた。瞳の中を覗かれて、すべてを見透かされている気分になって、涙が溢れそうなくらい切なくなる。

「ああああ……」

突如上昇を始めた快楽に、康太は目を瞑って喘ぐ。すると次のタイミングに、口に柔らかな感触が覆いかぶさる。驚き、目を開けると、超至近距離にきめ細かな肌が。

「んんっ。あうんん……。はう……。ん」

口内に侵入する軟体に言葉を遮られるものの、心地よい拘束に、康太はすぐに身を任せ。そして股間は昂りすぎていて、もはや自分のものではないようだった。

ビュウウウウウッ！ ビュッ！ ビュウウウウウッ！

我慢するという感覚もわからず射精してしまった。

レイアが顔を離すと、二人の口の間で透明な粘液が糸を引いて切れた。

「ハア、ハア……。んっ、ハア、ハア」

康太の荒い息遣いが届く距離に、レイアの上気した顔が留まっている。康太のペニスは未だ痙攣を続け、彼女はそれを決して放さず、あやし続けていた。

「はあ、はあ……。レイアさん。どうして……？」



レイアはぎこちない態度で顔を背けた。その顔はほんのり赤くなっている、よく見れば少し綻んでいた。

「あともう一つ、僕のことを好きでいてくれること。これが大事だなあと思って思ったよ」

「そつ、それはまあ、問題な………ハッ!!」

レイアは目を丸くして、自分自身の言おうとしていた言葉に衝撃を受けていた。

康太はなんだかとても穏やかな心地だった。自分がどれだけレイアに惚れているのか再認識し、その人が隣にいる幸福を改めて感じている。とそのとき、テレビから流れるニュースが康太の耳に入ってきた。

『……で爆破騒ぎが起きました』

しつとりと落ち着いた理知的な声の主は、康太の好きな北条貴子アナウンサー。しかしこのときは、ニュースの内容が気になってその美貌に目を奪われることはなかった。

『ちょうどそこに居合わせた人の話によりますと、最初の爆発は公園内で起こり、その後街中に及んだもようです。爆発は合計二十発近く起こり、警察は爆破テロではないかと調べを進めています』

そのニュースを聞いて、康太の頭の中は再び深刻な考えに戻った。

（今回は大した被害はなかったけど、本来の力ならこの世界を破壊し尽くしてしまうのか）

「……………」

二人の間には沈黙が流れる。

(どうやって確かめたらいいんだ。普通に聞いても答えてくれるわけがないし)

とそのとき、康太の中で一つの考えが浮かんだ。それはとても効果的とはいえないのだが、一刻も早くレイアを信じるための確証が欲しい康太には、他の考えを吟味する余裕がなかった。そして康太は覚悟を決める。

「レイア！」

わざと呼び捨てにして高圧的に迫る。

「な、なんだい」

突然康太は抱きつくど、そのまま床へレイアを押し倒す。

「なにをするんだい。おい！」

康太は女の子らしい細い手首を掴み、レイアを身動きできないように拘束する。康太にしてはかなり強めの力で、普通の女の子ならばとても逃げられない。しかし本当に世界を滅亡させるほどの魔神ならば、こんな拘束を解くことなどは容易いはずだ。

「はあ……、はあ……、はあ……、はあ……、はあ……」

自分の行動の大胆さに心臓がはね回り、緊張からか息が荒くなる。尋常な様子でないの

は自分でもわかる。しかしそれでよかった。信憑性が出てくるからだ。今はゲスに思われるほうが都合がよい。

「お、おい。いい度胸じゃないかい。覚悟はあるんだろうね」

レイアはいつもと変わらず不敵に語りかける。まだ緊迫感が足りない。そう思った康太は、その手でレイアの胸を鷲掴んだ。

「お、お前！ ……………くっ。……………」

レイアが語気を荒らげ、二人の間の緊張感が高まった。しかしそれ以上の抵抗は示さなため、康太はその手を着衣の隙間にかけて、強引にはだけさせる。薄手の下着とともに、くびれた腹部が晒される。しかし見とれてばかりはいられない。康太はたたみかけるように下着にも手を伸ばすと、その手をレイアが押しとどめた。

「康太……。お前、いったい……………す、少し落ち着いたらどうだい」

論さすように語り掛けるが、レイアにもいつにない焦りが見て取れる。もう少しだと感じた康太は、レイアの手を振り払い、そして乱暴に下着をずり下ろす。すると締め付けから解放された乳房が、ぷるんとまろび出た。

それはまるで極上のスイーツのようだった。ミルクを溶かし込んだかのような優しい白さが、今にも崩れそうなほどにぷるぷると揺れる。そしてその頂上辺りを、薄いピンク色

がまるでフルーツソースのように彩りを添え、先端の突起は控えめな大きさで、ツンとアクセントになっていた。

「くっ……。お、お前、本気なのかい。それならこっちにも、考えがあるよ」

その言葉にも耳をかさず、康太は乳房を掴んだ。柔肉に猛禽類のような指先が喰い込み、小豆大の突起は節くれたった指の間に挟まれる。

「本気だよ。もう止まらないから」

康太は乱暴に胸をもみ上げながら、レイアの太ももの間に膝を差し込んだ。そして体を覆いかぶせて密着し、その首筋に唇を押し付ける。

「そ、そんなに私を……。ん……。あつ……。……それなら」

「？」

どこか違和感を覚えながら、乱暴にレイアの身体をまさぐる。触れるところすべてで感じる柔肌。鼻腔を通り抜ける甘い香り。細胞レベルから色欲に染められる。

ふと、知らず知らずのうちにいきり立っていた股間がレイアの太もものに触れる。すると甘い痺れが身体を駆け巡った。その気持ちよさにもっと浅ましく、貪婪どんどんに押し付けたい欲求に駆られる。

(ダメだ、欲望に流されちゃ。冷静に、だけど本気だと思われるように)

しかし未だ抵抗を見せないレイアに、康太はだんだんと不安になっていく。

(なんで抵抗しないんだ？ いや、抵抗できないのか。それなら普通の女の子ってことで、いいんだよな。でも、ぜんぜん力が入ってないし……。いったいどつちなんだ？)

康太は体を起こし、レイアの表情を窺おうと覗き込む。するとレイアは上目遣いで康太を見つめ返した。濡れた瞳は情感を含み、少し開いた口からは熱い吐息が洩れている。それはレイアが初めて見せる女の顔で、康太は心臓を鷲掴みにされたように苦しくなった。

「綺麗だ……」

思わず洩れた康太の言葉に、レイアはどこか甘えるような響きで返事をする。

「……バカ」

いつもはなじるために使う言葉が、別の意味で康太のハートに突き刺さる。

(チョー可愛いんだけど。クラクラする。……っていうか、どこで止めればいいんだ？)

そろそろブレーキをかけたいのだが、ほんのり上気したレイアを目の前に、康太は暴走を始めてしまう。

乱れた着衣を奪い取っていき、最後に残されたアンダーウェアにも手をかける。するとレイアの腰がわずかに浮かんだ。

康太はその隙間から鼻息荒く脱がしにかかる。女らしい豊かな腰つきから下着を滑り降

ろすと、太ももとお腹の稜線が集まる一所に視線を集中させた。黄金の茂みを瞳に映し、その隙間からうつすら覗く肉の割れ目を目撃する。

（見てしまった。ついに僕は女の人の秘密の花園を！ ……つて、そうじゃない。な
んで抵抗しないんだ。ハニートラップか？ これはレイアさんの作戦なのか？）

初めて見る女性器に喜びつつも、康太の中では戸惑いが膨らんでいた。それは騙し討ちのような真似をしてエッチなことをする申し訳なさや、レイアを大切にしたいという想い、また、初めてそういうことをする不安、自信のなさから来るものだった。そして康太は、中絶するための口実を探し始める。

「あ……………う……………えつ……………と。あの……………」

「？」

なにもできずまごついていっていると、レイアが首を傾げて不思議がる。

「……………お前も初めてなのか？」

「あの……………、やっぱり……………えつと……………その、こういうのは……………」

止めよう、そう言いかけたときだった。レイアが恥ずかしそうに顔を背け言った。

「……………実は私も……………初めてなんだ。だから、その……………優しく……………してくれ」

「……………」

一瞬、レイアがなにを口にしたかわからず康太の頭は思考停止した。しかしその言葉の意味を理解した途端、康太の体は全身の血が沸騰したかのように熱くなる。

（この女を自分のものになりたい。この女のすべてを独占したい。他の誰にも渡したくない）
頭の中もカッカしてそれ以外のことに思考が向かなくなる。やがて当初の目的が頭から消え去って、欲情に血走った目をレイアの身体の隅々へ向ける。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

なよやかな肩、柔らかな胸の膨らみ、引き締まったお腹、そしてそこから急カーブを描く蜂腰ほうよう。女体らしい見事な曲線に、息遣いが荒くなるのを抑えられない。康太のペニスはぐんつと持ち上がり、窮屈になった股間を解放しようと衣服を脱ぎ捨てていった。

現れた男根は雄々しく反り返って、その先端は痛いほど張り詰めている。そんな状態で我慢できるはずもなく、康太は襲うようにレイアへ申し掛かった。

「お、おい。優しくと言っているのに」

太ももを割って、自分の腰をレイアの腰に擦り寄せる。凶器のような肉槍をレイアの中心に向かつて突き立てる。しかし無知なこともあって上手くいかず、興奮状態の康太はさらに空回りを繰り返す。

「んっ……痛……。違っ……そこじゃない……」

レイアは身体を起こし、焦りで我を失っている康太のペニスに手を伸ばす。

「ほら、落ち着け。……ここ……だろ」

優しく茎胴を握ると、レイアはペニスの先端を自分の入り口まで導いた。康太は冷や水を浴びせかけられたかのように冷静さを取り戻す。

「あ……ご、ごめん。したことないから……上手くないなくて……。ごめん」

「フフ。いつものお前らしくなったな。さっきまでは生意気だったが……まあ、許してやる。お前の気持ちは、その……ちよつと嬉しかったぞ。だが調子に乗るなよ。私も初めてなんだから……優しく、な」

まるで励ますような口ぶりだった。ピンとこない部分もあったが、康太は勇気づけられた。レイアが再び身体を横たえたので再び結合しようと試みる。

康太は「いくよ」と声をかけ、少しずつ腰を進めていった。怒張の先端が秘裂に埋まると、そこからズブズブと確かな手応えを感じながら掻き分けて進んだ。

「っ!! ん……」

膨らんだ亀頭部分が収まると、レイアは眉間に皺を寄せた。痛みを我慢するレイアとは対照的に、ようやく糸口を見つけた康太は顔を綻ばせる。

「うあああ……。あつたかいよ、レイアさんの中……。すごい」

中ほどまで砲身の挿入を果たすと、康太は思わず感激の言葉を洩らした。弾き返すほどきつく閉じられていた膣道は、一旦侵入を許すと今度はその力で茎膣を圧迫する。するとレイアの体温が熱いくらいに伝わって、同時に茎膣にびったりと張り付く吸着感、これまで人生で味わったことのない快感をもたらした。

「き、気持ちいい。……たまらないよ。嗚呼あ……最高だ」

幾重にも連なる襞が茎膣へと巻きつく。それぞれが別の生き物のように蠢いて、まるでミクロのレベルでも、行き届いたサービスを受けている気分だ。

一センチ進めるごとに巻きつかれ、締め付けられる期待感。腰を突き出すという動作が、こんなにも幸福に満ちているとは。腰から背筋にかけて走る甘い快感が徐々に鋭くなり、すぐに昇り詰めてしまいそうな危うさを我慢する。快感を味わいたけれど、まだ昇天したくない。贅沢な板挟みにあいながら、ついに康太は根元まで挿入を果たした。

「あああ、入った。レイアさん、全部入ったよ」

「う……ああ。そうだな」

目の端に滴を溜めたレイアが平気な素振りでする。組み敷いたレイアを見下ろし、康太は氣遣って尋ねる。

「大丈夫？ 痛くない？」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



おねショタウツチーズ！

あなたの魔力を注ぎなさい

落ちこぼれ魔術師ティムは、ある日膨大な魔力を暴走させてしまい退学の危機に陥ってしまう！ 彼の眠っていた力は性衝動と連動していたらしく、巨乳美女人生徒会長マリナの胸チラが原因で爆発、大惨事になってしまったのだった……。責任を感じたマリナは、ティムの性欲を制御するために、自ら性処理役としてひと肌脱ぐことを決意するが、そこに秘められた真意とは？

百合の騎士と薔薇の姫



幼少期から仕えている姫・アスハが政略結婚を受け入れることを、苦しい思いで見つめる近衛騎士のレイナ。反対したい気持ちを騎士としての忠誠心で必死に抑えていたが、2人きりになったとき、アスハから「結婚前に普通の恋愛をしたい、相手をして」と告げられたことで秘めたる想いが動き出す。最初は恋愛ごっこだったのに……それは忠誠から相愛へと形を変える。



ハーレムシークレット

姉フランギースの昇進によって、エリートの道を歩み始めたスペンサー。将来を約束された彼だが、実のところ可愛いだけで実力はまだまだ。そこで姉のライバルでいじめっ子のお姉さんライラや、スペンサーの寄親である名将ルーシーと誰にも言えないエッチな特訓を始める。さらに、姉の友人のバーバラとライラの親友のツヴァイもそれに加わりことになり……。

孕ませ勇射

美少女魔王軍と跡取りづくり



弱小勇者トウジは、魔王軍に捕まってしまうこのまま殺されてしまうと不安になっていた。しかし、美少女ツンデレ魔王セリシアは、なんと彼に種付け役を任命してくる。意外な言葉に戸惑うトウジだったが、人間と魔族の架け橋になればと考え……。世界平和ため、獣耳娘、サキュバス、ヤキモチ悪魔っ娘といった魔王軍の幹部たちを孕ませる、勇者の戦いが始まる！



デキる妹は いかげですか？

子作り特別法！

しっかり者の美乳妹・愛御と小悪魔な爆乳妹の命は、大好きな兄・満臣にパイズリやお尻でのエッチを迫るものの、最後の一線だけは越えられずにいた。だかそんなある日、兄妹での子作りを推奨する『子作り特別法』が施行される。すっかり子作りモードになってしまった妹たちは、兄に対して競うように中出しエッチをおねだりし始めるが!?

異世界転生で
おねショタハーレムを築こう



交通事故に遭った非モテ青年が異世界に転生!? 転生先は、なんと魔王と相討ちになった勇者と賢者の子! 前世の知識を発揮してハーレムを作ろうと決意した彼は、新たな勇者として大活躍! 人間の女王・ソフィ、妖精族の女王・エリザ、魔族の女王・カミラ、三種族の麗しき女王様たちとの、エッチなおねショタライフを満喫する!



性感淫魔エステ

搾精コースはじめました

モてるためのエステ体験してみませんか？ 幼なじみに告白するも、旺盛な精力が問題で撃沈した和希は、美人エステティシャン・カレンに誘われてお試してエステを受けることに。Sっ気のあるカレンによる濃密な射精快感を味わい、さらにエステティシャン見習いのルミナや他のスタッフからも責められて……。淫魔たちに囲まれての羞恥オスアクメがたっぷり♪

クールな生徒会長はパイロット候補生
エッチで乱れるほどシンクロ率アップ!



人型起動兵器・防人のパイロットを養成する士官学校に通う扶桑暁は、ある日、生徒会長を務める才媛・黒棺凜音の操縦パートナーに選ばれる。憧れの先輩のパートナーになり緊張する暁に、凜音は二人のシンクロ率を上げる訓練として、狭い操縦席でフェラを始めて……。クール美少女な生徒会長が、極薄ボディスーツ姿で乱れていく姿に、訓練そっちのけで大興奮!!

二次元ドリーム文庫 第343弾

異世界でもデキる妹は いかがでしょうか？

田舎貴族の青年ヴィンが、突如、王国の三美姫の兄で旦那様に出世？ 兄専用の子作り妹ハーレムで、無垢な爆乳姫と、クールでむっつりスケベな麗人姫と、やきもち焼きのツンデレ幼姫に中出しエッチをせがまれて逃げ場なし！ 男ならもうヤルしかない！

小説●089タロ一 挿絵●黒澤清崇

10月^{中旬}
発売予定!

二次元ドリーム文庫 第344弾

ハーレムフェイク

何もっていない浮浪者、やりたい放題の領主。見た目がそっくりな二人に周囲は驚き、家臣は浮浪者ウッドを影武者に提案する。城内で異質なハーレムを築く領主はいざ戦争になると女達を残して逃げだしてしまいウッドは領主になることに。

小説●竹内けん 挿絵●218

10月^{中旬}
発売予定!

二次元ドリーム文庫 第345弾

わたしのおっぱい育ててよ! 幼馴染みとお嬢様の育乳バトル

完璧なおっぱいを求める幼馴染みの千恵の育乳に付き合っ、彼女のおっぱいを揉まされている土郎。そんな彼は、転校してきたお嬢様・彩莉華の爆乳も育てることになってしまい!? 千恵と彩莉華は自分のおっぱいを揉むように迫ってくる!

小説●狩野景 挿絵●鈴木玖

10月^{中旬}
発売予定!

作家&イラストレーター募集!

編集部では作家、イラストレーターを募集しております

プロ・アマ問いません。原稿は郵送、もしくはメールにてお送りください。作品の返却はいたしませんのでご注意ください。なお、採用時にはこちらからご連絡差し上げますので、電話でのお問い合わせはご遠慮ください。

■小説の注意点

- ①簡単なあらすじも同封して下さい。
- ②分量は 40000 字以上を目安にお願いします。

■イラストの注意点

- ①郵送の場合、コピー原稿でも構いません。
- ②メールで送る場合、データサイズは 5MB 以内にしてください。

E-mail : 2d@microgroup.co.jp

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル

(株)キルタイムコミュニケーション

二次元ドリーム小説、イラスト投稿係

二次元ドリーム文庫
2Dカットキャラクター
ふみこちゃん
イラスト: 笹弘

